

令和5年度中学校教育研究協議会資料

教育研究

72巻

挑戦心を育む『令和の日本型学校教育』の実現

～ 挑戦心を高め、思考を深める協働的な学びのデザイン ～

令和5年5月23日(火)・24日(水)

埼玉大学教育学部附属中学校

『教育研究』第72巻の発刊に寄せて

校長 関口 睦

ここに、令和5年度埼玉大学教育学部附属中学校研究協議会に向け、『教育研究』第72巻を刊行させていただきます。

本校では昨年度から四年間の計画で研究テーマを「挑戦心を育む『令和の日本型教育』の実現」と定め、研究を進めて参りました。昨年度の研究では、挑戦心を「探究や学びを持続させるエネルギー」と捉え、「個別最適な学び」の在り方を研究の柱に据え発表させていただいたところです。研究を進めていく中で「挑戦心」が表れている生徒の姿と本校の捉える「個別最適な学び」の姿の共通の視点として、①主体的に課題に取り組んでいること②新たな課題を見つけようとする事③さらなる目標を設定しようとする事が浮かび上がって参りました。

個別最適な学びを進めるには「探究や学びを持続させるエネルギーである」挑戦心を高めていく必要があります。しかしながら、今子供たちが何かに挑戦するということがとても困難な状況にあると言えます。例えば、コロナウィルスの猛威が収まり、世の中もコロナ前と同じように動き出しているようですが、よく見るとすべてが元通りに、というようにはなっていないようです。何かに制限され未だにその見えないものを感じながら、生活をしていかなければならないという閉塞感を感じたことはないでしょうか。子どもたちの生活も大人の気づかないところでコロナ前と大きく変わり、制限を受けているものがあるように感じられます。

そのような中で挑戦心を育むためには何よりも自分自身の中に存在する多様性を大切に、自己信頼や自己肯定の感覚をもつことが必要となります。また、同時に、学ぶ対象に対する敬意、愛情、そして時には畏怖の念などを抱きながら、課題意識を膨らませ、問いを創造していくことも求められます。子どもたちの豊かな学びを成立させるには、個別最適な学びを進めていくと同時に協働的な学びにより自己肯定感を高めたり、新たな問いや目標を共に作っていく仲間づくりが求められます。本研究集録は、子どもたちが互いの挑戦心を大切に高め合いながら思考を深めていけるよう、協働的な学びのデザインの在り方についての経過報告としてここにお届け申し上げるものです。

最後になりますが、ご多忙をきわめておられる中、ご支援くださいました埼玉大学教育学部、埼玉県教育委員会、さいたま市教育委員会、埼玉県連合教育研究会、埼玉県中学校長会、さいたま市中学校長会、埼玉縣市町村教育委員会連合会の皆様に厚く御礼申し上げます。今後とも御指導御鞭撻のほど、なにとぞよろしくお願い申し上げます。

中学校研究協議会 第1日 [令和5年5月23日(火)]

(1) 研究授業等 1校時(13:25~14:15) 2校時(14:30~15:20)

教科等	学年・組	校時	授業者	題材等
国語	1年B組	1	大谷 颯	表現を工夫してスピーチしよう～スピーチ入門先輩から学ぶ～
	2年D組	1	碓氷 愛実	表現の効果を考えて随筆を書こう～言葉で飾る生活のひとコマ～
	3年C組	2	大塚 悠希	「握手」を批判的に読む～感想をアップグレードしよう～
数学	2年A組	2	奥田 勇司	三角形と四角形
	3年D組	1	岸本 航司	多項式
理科	2年C組	1	山本 孔紀	化学変化と原子・分子
	3年B組	2	谷津 勇太	運動とエネルギー
音楽	2年B組	1	柳下 康明	曲想と歌詞の内容との関わりを理解して、工夫して歌おう
	1年C組	2	柳下 康明	曲想と音楽の構造との関わりを理解して、音楽のよさを味わって聴こう
美術	3年A組	2	小西 悟士	「〇〇を着る！」～ファッションの可能性を考える～
	2年A組	1	吉田 真梨	これが名物!ご当地(新)駄菓子開発会議!!

(2) 研究協議 分科会(15:35~16:45)

教科等	研究主題	教科等提案者	指導助言者	司会者
国語	実社会や実生活に生きて働く国語の資質・能力を育成する授業の創造～自ら言葉を吟味する必要がある単元の開発～	附属中学校国語科 大塚悠希 碓氷愛実 大谷颯	県教育局市町村支援部 義務教育指導課主任指導主事 浅井 大貴 埼玉大学准教授 本橋 幸康	深谷市立南中学校 教諭 牧田 麗
数学	統合的・発展的に考察する力を育成する数学学習指導～新たな問いを見いだす学びのデザイン～	附属中学校数学科 岸本航司 奥田勇司 大野洋嗣	県教育局市町村支援部 義務教育指導課指導主事 松本 信寿 埼玉大学教授 二宮 裕之	新座市立第三中学校 教諭 曾我部 大希
理科	自然を主体的・科学的に探究する資質・能力の育成～多様な学習成果を生かす授業を通して～	附属中学校理科 山本孔紀 谷津勇太 小岩井 爽	県教育局市町村支援部 義務教育指導課主任指導主事 山崎 斉 埼玉大学准教授 中島 雅子	越谷市立富士中学校 教諭 尾形 大
音楽	生涯にわたって音楽に親しむ資質・能力の育成に向けた授業改善～試行錯誤を繰り返し、音楽表現を追究する生徒の育成～	附属中学校音楽科 柳下康明 大浦 早紀	県教育局市町村支援部 義務教育指導課主任指導主事 佐藤 太一 埼玉大学准教授 森 薫	新座市立第五中学校 教諭 古沢 希美
美術	自らの理想を追求し続ける生徒の育成を目指した学習指導の工夫～試行錯誤を促す3年間を見通した学びのデザイン～	附属中学校美術科 小西悟士 吉田 真梨	県教育局市町村支援部 義務教育指導課指導主事 新居 良介 埼玉大学准教授 平野 英史	さいたま市立東浦和中学校 教諭 石神 憲二郎

中学校研究協議会 第2日 [令和5年5月24日(水)]

(1) 研究授業等 1校時(13:25~14:15) 2校時(14:30~15:20)

教科等	学年・組	校時	授業者	題 材 等
社会	1年A組	2	石高 吉記	歴史的分野 A 歴史との対話(2)身近な地域の歴史 ～次世代へ受け継ぎたい!私たちの地域の歴史～
	2年C組	2	高橋 佑樹	地理的分野 C 日本の様々な地域(1)地域調査の手法 ～歩いて発見!附中周辺の特徴～
	3年A組	1	細野 悠司	公民的分野 B 私たちと経済(1)市場の働きと経済 ～すごいポロシャツ屋さんによる新商品発表会～
保健 体育	2年A組	1	山田 大生	球技(ネット型 バレーボール)
	ワークショップ	2		「学習指導計画の作成」～単元の指導と評価の計画～
技術 ・ 家庭	2年B組	1	木村 僚	Bエネルギー変換の技術「身近な動力伝達技術の活用を考えよう」
	2年C組	1	宗 真理子	C消費生活・環境(2)消費者の権利と責任
	ワークショップ	2		UDLフレームワークを用いた授業設計に関するパネルディスカッション
英語	2年D組	1	蓬澤 守	PROGRAM 2 Leave Only Footprints
	ワークショップ	2		英語科における「思考・判断・表現」の指導の在り方について
学校 保健	3年B組	1	内田 貴美子	健康な生活と疾病の予防(力)健康を守る社会の取組
	3年B組	2	七木田 文彦 内田 貴美子	学級活動(2)心身共に健康で安全な生活態度や習慣の形成

(2) 研究協議 分科会(15:35~16:45)

教科等	研究主題	教科等提案者	指導助言者	司会者
社会	公民としての資質・能力の基礎を育成する社会科学習～必要感がある協働的な学びを生み出す学習指導の工夫～	附属中学校社会科学科 石高 吉記 細野 悠司 高橋 佑樹	県教育局市町村支援部 義務教育指導課指導主事 丸橋 直樹 埼玉大学教授 桐谷 正信	さいたま市立指扇中学校 教諭 佐藤 紗李
保健 体育	豊かなスポーツライフを実現する資質・能力の育成へ向けた授業改善～課題の合理的な解決に夢になる生徒の育成に向けて～	附属中学校保健体育科 山田 大生 松本 菜美	県教育局県立学校部 保健体育課指導主事 新井 知章 埼玉大学教授 石川 泰成 埼玉大学准教授 古田 久	上尾市立太平中学校 教諭 大山 智史
技術・ 家庭	未来を切り拓く資質・能力の育成～UDLのフレームワークで構築する学習指導の提案～	附属中学校技術・家庭科 (技術分野)木村 僚 (家庭分野)宗 真理子	(技術分野) 県立総合教育センター指導主事 加藤 敦 (家庭分野) 県立総合教育センター指導主事 大山 方住 (技術分野)埼玉大学教授 山本 利一 埼玉大学教授 名越 斉子 (家庭分野)埼玉大学教授 重川 純子	(技術分野) 所沢市立美原中学校 教諭 船橋 秀太 (家庭分野) 越谷市立東中学校 教諭 佐久間 陽子
英語	コミュニケーションの質の向上を図る学習指導の工夫～他者との協働を大切に、主体的に課題を乗り越えようとする生徒の育成～	附属中学校英語科 蓬澤 守 小内 貴司 池田 翔吾	県教育局市町村支援部 義務教育指導課指導主事 杉崎 亮 埼玉大学教授 及川 賢	草加市立谷塚中学校 教諭 小泉 拓也
学校 保健	一人ひとりの質の高い学びの実現に向けた健康教育～これからの創造し、多様な選択を尊重して支え合う力を養う～	附属中学校養護教諭 内田 貴美子	県教育局県立学校部 保健体育課指導主事 澤村 文香 埼玉大学准教授 七木田 文彦	川口市立在家中学校 養護教諭 松原 朋世

目 次

・あいさつ	1
・総論 「挑戦心を育む『令和の日本型学校教育』の実現」	5
～挑戦心を高め, 思考を深める協働的な学びのデザイン～	
・各教科等編	
・国 語 科	23
・社 会 科	27
・数 学 科	31
・理 科	35
・音 楽 科	39
・美 術 科	43
・保健体育科	47
・技術・家庭科	51
・英 語 科	57
・学 校 保 健	61
・学習指導案資料について	65
・おわりに	66

総論

「挑戦心を育む『令和の日本型学校教育』の実現」

～挑戦心を高め、思考を深める協働的な学びのデザイン～

「挑戦心を育む『令和の日本型学校教育』の実現」 ～挑戦心を高め、思考を深める協働的な学びのデザイン～

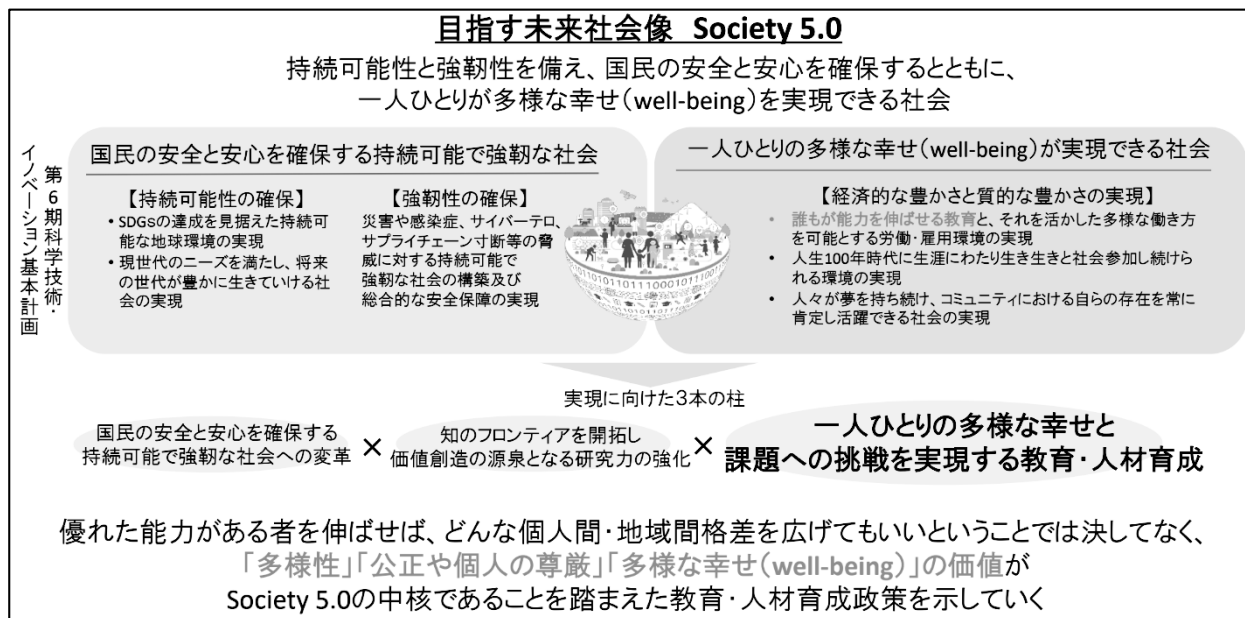
1 問題の所在

(1) 社会的背景

社会の変化が加速度を増し、複雑で予測困難となってきた中、子供たちの資質・能力を確実に育成する必要があるため、そのためには、新学習指導要領の着実な実施が求められている。さらに「個に応じた指導」を学習者視点から整理した概念である「個別最適な学び」と、これまでも「日本型学校教育」において重視されてきた、「協働的な学び」とを一体的に充実することが求められている。そこで、日本型学校教育が果たしてきた役割（第3期教育振興基本計画の理念【自立・協働・創造】）を継承しつつ、学校における働き方改革やGIGAスクール構想を強力に推進するとともに、新学習指導要領を着実に実施し、学校教育を社会に開かれたものとしていくことを目指していく必要がある¹⁾。

2016年に「第5期科学技術基本計画」において、経済発展と社会的課題の解決を両立する人間中心の社会として「Society 5.0」が提示された²⁾。さらに2021年の「第6期科学技術・イノベーション基本計画（以下「6期計画」）」において、「持続可能性と強靭性を備え、国民の安全と安心を確保するとともに、一人ひとりが多様な幸せ（well-being）を実現できる社会」としてSociety 5.0が再定義された。6期計画においては、このSociety 5.0の実現に向けた三本の政策の柱の一つに「一人ひとりの多様な幸せと課題への挑戦を実現する教育・人材育成」を新たに掲げ、探究力と学び続ける姿勢を強化する教育・人材育成システムへの転換が目指されている（資料1）。

資料1 目指す未来社会像 Society 5.0



このような変化の激しい世の中を生き抜くために必要とされる資質・能力の一つとして、「困難への挑戦心」に注目した研究がある。例えば、竹橋・島井（2017）はこれからの時代を生き抜く子供たちに求められる資質・能力について、「変化が大きく不確実な現代では、個人にせよ組織にせよ、過去にうまくいっていた慣習に従っているだけでは持続的な発展が困難であるといえる。（中略）社会の変化に適応する上では、自分にとって難しそうに思えることでも意欲高く取り組むという困難への挑戦心が鍵となる。また、実際に人の能力を伸ばす上でも困難への挑戦心が極めて効果的に働いていることがエキスパートや学習方略の研究により明らかにされている。」³⁾とし、困難

への挑戦心は、現代社会における最も重要な資質の一つであり、その育成は重要な教育課題として位置づけることができる。これより、困難への挑戦心は、不確実な未来を生きるための能力を、子供たちが自ら伸ばしていくうえで重要な資質であると考えられる。しかしながら、わが国の子どもは先進諸国と比べて「困難への挑戦心を有している割合が低い」といった課題があることが明らかにされており、かつ、挑戦心の育成に焦点を当てた教育実践はほとんど行われてきていない⁴⁾。

(2) 昨年度の研究主題（副題）及び成果と課題

全国的な傾向と同様に、本校においても生徒の「挑戦心」の低さが課題である。そこで、昨年度より「挑戦心の育成」を柱とした学校研究を進めてきた⁵⁾。具体的には、「挑戦心を引き出す学習指導の工夫」と「個別最適な学びの工夫」を研究の視点として設定し、本校での各教科の学びにおける「挑戦心が表れている具体的な生徒の姿」を設定するとともに、そのような姿が表出するような学習課題の設定及び生徒自らが学習を振り返り、変容を自覚できるような工夫について研究を行った。

生徒及び教員を対象としたアンケート回答の記述分析より、生徒が困難に向き合い挑戦する学びの場面を、各教科等の授業で計画的に設定することによって、生徒は自らの「挑戦心」の発揮や高まりを意識するようになることがわかった。また、生徒による自らの「挑戦心」の意識化がより効果的になされるためには、「挑戦心」を発揮したり「挑戦心」が高まったりするきっかけとなった事柄や得られた成果などといった、生徒のもつ「挑戦心」に影響を与えた学びの過程を自覚できるようにする必要があること等の知見が得られた。しかしながら、昨年度の研究では、生徒の挑戦を後押しするような適切なフィードバックの不足や生徒の学びを効果的に改善するための、教師や仲間との協働の在り方についての検討が不十分であることが課題として挙げられた⁵⁾。

2 本年度の研究について

(1) 本校における挑戦心の定義の再考


昨年度の研究では、生徒の「挑戦心」の高まりをより具体的に把握するために本校の教育活動において、特に生徒の「挑戦心」が表れていると思われる具体的な姿を考えていくこととした。一般に、「挑戦心」とは、「困難な物事や新しい記録などに立ち向かう」ための心理的な傾向を指す。これを踏まえ、本校教員が挙げた生徒の姿が資料2である。

資料2 「挑戦心」が表れている生徒の姿の例

【「挑戦心」が表れている生徒の姿の例】

- ・ 未知の内容に取り組もうとしている
- ・ 試行錯誤してよりよい結果を得ようとしている
- ・ 課題を解決しようとはきりめずに取り組み続けている
- ・ これまでの考え方や解決の仕方を応用してさらに考え続けている
- ・ 得意不得意に関わらず「まずはとにかくやってみよう」と行動を起こしている
- ・ 上手いかないことや失敗を前向きに捉えている
- ・ 新たな取り組みに自らの意思に基づいて取り組んでいる
- ・ 課題解決に必要な方略を思い巡らせている
- ・ 他者に頼ろうとしているのではなく、高め合おうとしている
- ・ 他者の様子を見て自分自身を向上させようと意欲を高めている

【共通の視点】

- 
- 生徒が…①主体的に課題に取り組んでいること
 - ②新たな課題を見つけようとする
 - ③更なる目標を設定しようとする

これらのように考えられた生徒の姿から、「挑戦心」をもつ生徒の姿は多様であると考えられるが、それらの共通点として次の2点が抽出できた。一つは、生徒が主体的に課題に取り組んでいること、もう一つは、その学習過程の中で、それぞれが新たな課題を見つけようとしたり更なる目標を設定しようとしたりする様子が見られることである。これらの点が授業で現れるかどうか注目し、研究を進めてきた。

昨年度の研究を終えた後の教員アンケート（令和4年8月実施）からは、「挑戦心を育むにあたって、生徒の興味・関心を高め、学びを続けたいと思わせるというように、段階を踏んでいくことの重要性を感じた」や「保健体育科では、夢中になっている生徒の姿と夢中に関してのエビデンスをどのように示していけるかを検討した」、「社会科では、挑戦心を『学習活動において、現代社会に見られる課題の解決から、よりよい社会の実現を目指す姿』と捉えたが、教科としては馴染みやすく、生徒も普通の授業に加えて、さらに大切な視点をもつことができた」などといった意見や感想が得られた。

さらに、生徒実態アンケート（令和4年11月実施）からは、「あなたの中にある挑戦心とは何ですか?」という項目回答の中に、「殻を破る（破ろうとする）こと」「好奇心をもつこと」「失敗を恐れずに何度も取り組むこと」「物事を前向きに捉えること」「試行錯誤し、その結果成長するということ」などの記述が見られた。

以上より、生徒が挑戦心を発揮すると、探究や学びが持続し、その結果、学習前の自分からよい変化があったことを実感できるようになると考えられる。そこで、本年度は、挑戦心を「探究や学びを持続させるエネルギー」と捉え直すこととした。これを高めるためには、各教科等の授業において教科・領域で扱う概念の本質を重視し、思考力・判断力・表現力等の資質・能力をよりよく育成することが必要であると考えられる。

(2) 挑戦心と個別最適な学び、協働的な学びの関わり

昨年度の研究の柱の一つであった個別最適な学びの在り方については、挑戦心と関連付けて研究実践を行うことで、様々な生徒の姿が見えてきた。本校教員アンケート（令和4年8月実施）から見える本校の捉える個別最適な学びとは、以下のようなものであった（資料3）。

資料3 本校の捉える個別最適な学びの姿の例

【本校の捉える個別最適な学びを進める生徒の姿の例】

- ・ 生徒一人ひとりが、自分が学んだ成果を自覚している
- ・ 準備・練習の量や方法など自分に合った学び方を生徒自身が考え、選択して学ぶ
- ・ 問いに対してどのように学ぶのか学び方を選択して学習を進める
- ・ 生徒一人ひとりが自分にあった学び方で、それぞれに合った挑戦ができる
- ・ 他者との学びの中で、他者の考えや表現を聞いて、自分の考えや表現を再構築する
- ・ 同じ活動でも、難易度を選択でき、一人ひとりが自分に合った難易度で取り組む
- ・ 学習課題としての「問い」を自ら立て、協働しながら科学的な探究を行い解決していく
- ・ 一人ひとりの能力を教師も生徒も理解しようとする
- ・ 対象と自分との関連性が最適になるように、環境を整えたり、努力し続けたりする
- ・ 自分の表したい思いをしっかりともち、それを表すために材料や用具を選択してよりよい表現を求めて活動している

【共通の視点】

- 生徒が…
- ①自ら課題を立てること
 - ②課題に対して主体的に学び方を選択すること
 - ③更なる目標を設定しようとする

これらのような生徒の姿からは、前述の挑戦心が表れている生徒の姿の例と共通する部分が多くあることがわかった。すなわち、個別最適な学びを進めるためには、生徒には挑戦心の高まりが必要であり、教師は個別最適な学びの環境を整えるとともに挑戦心を高める支援を継続していく必要があるといえる。

さらに、個別最適な学びと往還関係にある協働的な学びについて、中学校学習指導要領等では、その意義が三点挙げられている⁶⁾。それらは、①多様な情報に触れること、②異なる視点から検討できること、③一緒に学習することが相手意識や仲間意識を生み出すことである。これらを踏まえ、本校では次の三点を重視しながら協働的な学びの充実を図ることにした。

(ア) 多様な情報を活用して協働的に学ぶ

- ・多様で多量な情報を収集して話し合ったりすることは、その後の情報の整理や分析を質的に高める。

(イ) 異なる視点から考え協働的に学ぶ

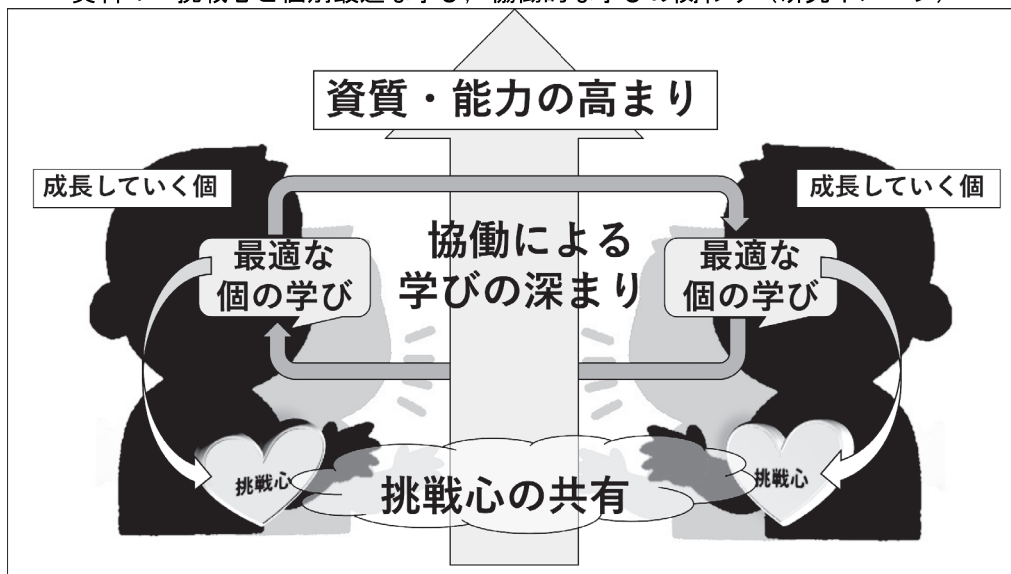
- ・異なる視点や考えを基にして検討していくことで、事象への認識が深まり、さらなる探究的な学習へとつながり、互いのよさや可能性を尊重し合う。

(ウ) 力をあわせたり交流したりして協働的に学ぶ

- ・相手意識や仲間意識を基に共に学び行動する中で、この学習の質とともに集団の学習の質を高め、社会参画の意識も育成する。

以上のように、学習の主体として個別最適に学ぶことと、協働的に学ぶことをバランスよく行い、それぞれの学びのよさを実感することで、探究的な学びが持続し発展することが期待される。さらに、学習集団として一人では困難な課題に向き合い、一人ひとりの挑戦心が課題の解決を目指して結集されるときに、挑戦心がさらに高まると考えられる。それに伴い、生徒一人ひとりの思考力・判断力・表現力といった資質・能力が高まり（成長）、自分に自信をもつことができるようになると考えられる。本年度は、このような学びが実現する授業を目指していく（資料4）。

資料4 挑戦心と個別最適な学び、協働的な学びの関わり（研究イメージ）



3 研究副題の設定と目指す生徒像

(1) 研究副題の設定

前述の「問題の所在」及び「本年度の研究について」を受け、本年度の研究の目標を「生徒一人ひとりがもつ挑戦心を基にして、協働的に学び合うことによって思考を深め、未来を生き抜くために必要な資質・能力の向上を図ること」と設定し、研究副題を「挑戦心を高め、思考を深める協働的な学びのデザイン」とした。ここでは、個々のもつ挑戦心の高まり（試行錯誤の場面や失敗の経験）が協働的な学びの充実にどのような効果をもたらすのかについて検証していくことを目的とする。

(2) 目指す生徒像

本校の学校教育目標と本年度の研究との関連について論じる。本校では昨年度以前より、学校教育目標が目指す生徒像をより具体化し（資料5）、その実現に向けた教育実践を積み重ねてきた。本年度の研究においても、その目的を達成することは学校教育目標の実現と重なるといえる。

資料5 学教教育目標と目指す生徒像（努力目標）

学校教育目標	正しい判断力とたくましい実践力をもった自主的人間の形成		
目指す生徒像	正しい判断力	たくましい実践力	自主的人間
	①広い視野をもった生徒	①たくましい体力をもった生徒	①自ら学ぶ生徒
	②深く考える生徒	②強い精神力をもった生徒	②協調して行動できる生徒
	③豊かな情操をもった生徒	③変化に対応できる生徒	③集団の向上に努める生徒

(3) 各教科等の研究主題・副題の設定

今年度の研究主題及び副題を受け、各教科等の研究主題と副題を以下のように設定した。詳細に関しては、各教科等の研究論を参考にされたい。

国語	実社会や実生活に生きて働く国語の資質・能力を育成する授業の創造 ～自ら言葉を吟味する必要のある単元の開発～
社会	公民としての資質・能力の基礎を育成する社会科学習 ～必要感がある協働的な学びを生み出す学習指導の工夫～
数学	統合的・発展的に考察する力を育成する数学学習指導 ～新たな問いを見いだす学びのデザイン～
理科	自然を主体的・科学的に探究する資質・能力の育成 ～多様な学習成果を生かす授業を通して～
音楽	生涯にわたって音楽に親しむ資質・能力の育成に向けた授業改善 ～試行錯誤を繰り返し、音楽表現を追究する生徒の育成～
美術	自らの理想を追求し続ける生徒の育成を目指した学習指導の工夫 ～試行錯誤を促す3年間を見通した学びのデザイン～
保健体育	豊かなスポーツライフを実現する資質・能力の育成へ向けた授業改善 ～課題の合理的な解決に夢中になる生徒の育成に向けて～
技術・家庭	未来を切り拓く資質・能力の育成 ～UDLのフレームワークで構築する学習指導の提案～
英語	コミュニケーションの質の向上を図る学習指導の工夫 ～他者との協働を大切にして、主体的に課題を乗り越えようとする生徒の育成～
学校保健	一人ひとりの質の高い学びの実現に向けた健康教育 ～これからの創造し、多様な選択を尊重して支え合う力を養う～

4 研究計画

(1) 4年次までの見通し

令和3年6月からスタートした研究の1年次では、前述のとおり本校の課題を基に、挑戦心とは何かを捉え、個別最適な学びの充実を目指した。2年次である令和4年6月からは、個別最適な学びと協働的な学びの往還に視点を当て、特に協働的な学びの充実による資質・能力の向上を目指した。今後、今年度得られた知見を基に、生徒の学びの実相を適切に捉える評価の充実を目指していく予定である。

研究計画（案）

協議会年度	研究主題「挑戦心を育む『令和の日本型学校教育』の実現」	
	年次	研究の内容
令和四年度	1年次 (R3.6～ R4.5)	副題 ～挑戦心を引き出す学習指導と生徒の個別最適な学びの在り方～ ○生徒の挑戦心を引き出す探究課題と指導法の研究 ○「令和の日本型学校教育」における個別最適な学びと協働的な学びの研究 ○ICTの最適な組合せの検証・改善 ○大学・学部・附属学校園との連携の推進
令和五年度	2年次 (R4.6～ R5.5)	副題 ～挑戦心を高め、思考を深める協働的な学びのデザイン～ ○「令和の日本型学校教育」における個別最適な学びと協働的な学びの往還による学びの質の向上についての検証・改善 ○生徒の挑戦心を育む探究課題と協働的な学びの関わり方の検証・改善 ○ICTの最適な組合せの検証・改善 ○大学・学部・附属学校園との連携の推進
令和六年度	3年次 (R5.6～ R6.5)	副題 ～資質・能力を育む指導と評価の一体化の充実～ ○教師の指導改善と生徒の学習改善のための指導と評価の一体化 ○「令和の日本型学校教育」における個別最適な学びと協働的な学びの検証と改善 ○カリキュラム・マネジメントの推進 ○これまでの実践とICTとの最適な組合せの検証と改善 ○大学・学部・附属学校園との連携の推進と改善
令和七年度	4年次 (R6.6～ R7.5)	副題 ～資質・能力を育む指導と評価の実際～ ○資質・能力を育む指導と形成的評価の実際 ○評価の三観点の関連と総括的評価の実際 ○カリキュラム・マネジメントの推進 ○これまでの実践とICTとの最適な組合せの検証と改善 ○大学・学部・附属学校園との連携の推進と改善

(2) 今年度の研究推進スケジュール

本校では、各教科より1名の教員が参加する研究部会において、研究の方針や目標、手立ての検討・協議を行っている。研究部会から提案される研究総論は、年間に5回ある研究全体会にて共有され、各教科等で研究実践を積み重ねていった。

月	研究内容
7月	・第1回校内授業研究会（美術科） ・研究部会にて新研究検討①
8月	・研究部会にて新研究検討② ・第2回研究全体会 テーマ「R5研究総論提案① 個別最適な学びと協働的な学びの往還について」 ・夏季研修会 「挑戦する学びを保障する学習指導」（講師：埼玉大学教授 庄司 康生先生）
9月	・研究部会にて新研究総論検討①
10月	・研究部会にて新研究総論検討② ・第3回研究全体会 テーマ「R5研究総論提案②」

	①生徒と教師の挑戦心の捉えの検証 ②生徒実態アンケートの項目検討 ・研究実践開始
11月	・研究部会にて新研究総論検討③ ・第1回生徒実態アンケート調査実施
12月	・第2回校内授業研究会（国語科） 協議題「生徒の挑戦心や、育成を目指す資質・能力を育む授業づくりにおいて、国語科での学びに求めること」 ・第4回研究全体会 テーマ「R5研究総論提案③ 協働的な学びのデザインに関する手立てについて」 ・研究部会にて新研究総論検討④及び各教科等の教科論の検討①
1月	・第3回校内授業研究会（保健体育科） 協議題「協働的な学びの充実とは」 ・第5回研究全体会 テーマ「R5研究総論の決定」 ・各教科等の教科論の検討②
2月	・埼玉大学教育実践 Forum での研究総論概要説明と研究の進捗状況の報告
3月	・研究部会にて今年度のこれまでの成果の整理 ・各教科等の教科論と研究実践の整理

5 研究の実際

(1) 研究の方法

教員アンケート（令和4年8月実施）の回答記述や前述までの研究の経緯から、協働的な学びの充実に向けての手立てとしては「多様な他者の在り方」や「他者を価値ある存在として尊重するという考えをもつことのできる学び」、「一人ひとりの良い点や可能性を組み合わせる学び」といった共通の視点が見えてきた。

また、生徒アンケート（令和4年11月実施）では、「他者と異なること、他者は多様であることの価値を実感できた場面はありましたか」といった質問に対して、22.5%の生徒が否定的な回答をしていた。その一方で、この回答をした生徒のほとんどは、個人として挑戦心をもって学びに向かっている（質問項目「難しく自信がないときでも、失敗を恐れなくて挑戦しましたか」について肯定的に回答した）生徒が多かった。これらより、生徒の学びが個人で完結することなく、個人の挑戦を支える他者との協働を促すための手立てを講じていく必要があると考える。

以上を踏まえ、本年度は各教科等の授業づくりにおける共通の視点として、以下の三つの手立てを設定した。これに加え、各教科等でそれぞれの特性に合わせた手だてを設定し研究実践を行った。

①困難に向き合い、試行錯誤するなどの挑戦する学びの場面の設計

- ・挑戦心を引き出す課題設定の工夫についての継続研究

②生徒自らの「挑戦心」の意識化

- ・学びの過程（挑戦心の発揮による向上の実感）を自覚する機会を意図的に設ける工夫

生徒による自らの「挑戦心」の意識化がより効果的になされるために、「挑戦心」を発揮したり「挑戦心」が高まったりするきっかけとなった事柄や得られた成果などといった、生徒のもつ「挑戦心」に影響

響を与えた学びの過程について自覚する機会を意図的に設ける。

- ・挑戦心を後押しするような適切なフィードバックの工夫

③教師や仲間との協働的な学びの充実の手立て

- ・協働的に学ぶ場면을意図的に組み入れる工夫

協働的な学びの充実のために、相手意識や仲間意識を基盤として、ともに学び行動する中で、学習の質とともに集団の学習の質を高めていくことができるような学習環境を整える。その中で、下記の視点で学習場면을デザインする。

(視点)多様な情報を活用しながら異なる視点から考え、協働的に学ぶ場면을意図的に組み入れた学習展開の工夫

多様で多量な情報を収集し、異なる視点や考えを基にして検討していくことで、事象への認識が深まり、さらなる探究的な学習へとつながり、互いのよさや可能性を尊重し合うことができるといったような学習場면을意図的に設定する。

以上に基づいて各教科等の単元・題材デザイン及び授業がどのように実施されたかを分析した。具体的には、生徒のアンケート記述（四件法や自由記述）の回答の傾向や、記述内容を分析した。その際、以下のような価値分析の視点に基づき、本研究の目標の達成状況を考察した。

<価値分析の視点>⁷⁾

①学習者である生徒の中にある「挑戦心」とはどのようなものか。

- ・変容を追跡し、資質・能力の向上との相関関係を明らかにしていく。

②今回の各教科等の学びは、挑戦心を高めるような学習場面の設定となっていたか。

- ・自らの挑戦心が発揮されたり高まったりする場面があったかについて、学習場面の設定との関わりについて分析する。

③自らの挑戦心を後押ししてくれるような存在や出来事はあったか。

④教師や仲間との協働的な学びは充実していたか。

(ア) 異なる情報やたくさんの情報を入手するといった学習活動はあったか。

(イ) 表現することで自らの認識を再構成し構造化する場面はあったか。

(ウ) 情報を提供し合い、関連付けて、知を創出する場面はあったか。

(エ) 他者と異なること、多様であることの価値を実感する場面はあったか。

(オ) 関わり合い力を合わせること、共有することの価値を実感する場面はあったか。

(3) 実践例

①困難に向き合い、試行錯誤するなどの挑戦する学びの場面の設計

【例1】数学科 「平行と合同」

ア 具体的な手立て

本単元では「ユークリッド幾何学」に基づき、課題に連続性をもたせ、常に統合・発展を繰り返してきた。課題「星形多角形の先端にできる角の大きさの和を求めよう」はその集大成ともいえる課題である(資料6)。本課題の解決方法は実に多様だが、一つ一つがこの単元での学びと連続しており、

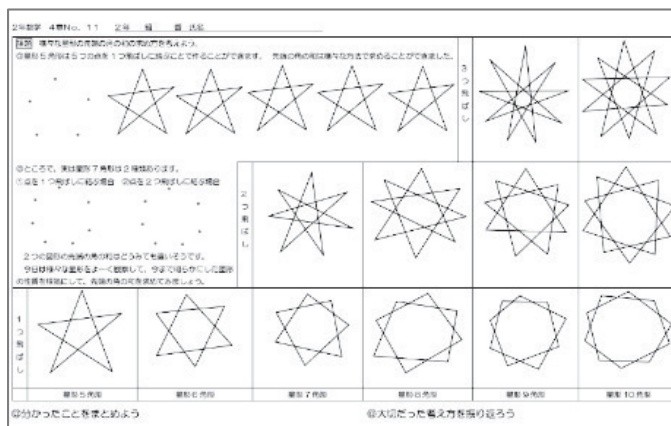
そのつながりに気付くことで、本課題には明示されていない「星形n角形」についても思考を広げることができる。

単元全体を通して、常に学びのつながりを意識させ、単元の終わりにその集大成ともいえる課題を設定することによって、生徒が学んだ数学を用いて、更なる問題解決に自ら向かう姿勢を醸成できると考える。

イ 効果や成果

ほぼ全ての生徒が、黙々と自らの学びを振り返りながら、試行錯誤を繰り返し課題解決にひたむきに取り組む姿を確認できた。決して簡単とはいえない課題だが、諦める生徒は誰もおらず、授業後も取り組み続け報告に来る生徒や、さらに発展、一般化を目指す生徒も多数見られた。このような良質な課題や単元設定を他単元でも見いだし洗練していくことが課題である。

資料6 星形n角形に関する課題とそのワークシート



【例2】美術科 「わたしのためのスクラップ帳をつくろう！」と「え！？もじ？～誰にでも伝わる楽しい文字をつくろう！～」

ア 具体的な手立て

学習指導要領において美術科では、学習する内容について1学年と2・3学年でそれぞれ一つのまとまりとしている。それを受け、本校では1学年の学習を基本的な技能や知識の習得に重点を置いた題材を設定し、2・3年生では1学年での学習を基に、自分の表したいことに合わせて自分らしく表していくことに重点を置いた題材を設定し、3年間を見通した学習場面を設計している。1学年で多様な描画材料や材料に出会い、それらに触れ、どのような表現が生まれるのか試行錯誤しながら表していくことを通して、自分の表したいことに向かって表現方法を追求していくことのできる知識・技能を身に付ける。

イ 効果や成果

2学期に取り組んだ表現活動において、1学期に学習した内容を生かし、自分の表したい内容に合わせて描画材料を試し、選び、表現していく姿が見られた。用意した描画材料をそれぞれが選んで制作していたため、同じ題材の中でも、生徒一人ひとりが様々な表現方法で制作をしていた。また、生徒の振り返りの中でも「試すことがとにかく大事だと思った」「1学期に学習したことを使って、表現方法を考えた」という記述が見られ、生徒の中でも自覚が生まれていることが分かった。

② 生徒自らの「挑戦心」の意識化の工夫

【例1】国語科 「領域ごとの学習の振り返り」

ア 具体的な手立て

「挑戦心」を生徒自身に意識させるためには、自らの学習を見直し、調整していくことが必要不可欠である。そのためにも、学習の振り返りが重要であることは間違いない。昨年度は単元ごとに振り返りのた